総合資源エネルギー調査会 電力・ガス事業分科会 原子力小委員会

放射性廃棄物ワーキンググループ（第３０回会合）

日時　平成29年２月28日（火）８：00～10：03

場所　経済産業省　本館17階　第１特別会議室

○小林放射性廃棄物等対策課長

おはようございます。定刻になりました。ただいまより総合資源エネルギー調査会 電力・ガス事業分科会 原子力小委員会 第30回になります放射性廃棄物ワーキンググループを開催いたします。

本日、大変朝早い時間にもかかわらず、それからご多忙の中、多くの委員の皆様にご出席をいただきました。まことにありがとうございます。

本日の委員の出欠ですけれども、徳永委員のみご欠席ということでございます。

それから、オブザーバーのご紹介をいたします。原子力発電環境整備機構、ＮＵＭＯから近藤理事長、中村専務理事及び宮澤理事にご参加いただきます。電気事業連合会から廣江副会長兼最終処分推進本部長にもご参加をいただきます。よろしくお願いいたします。

早速ですけれども、資料の確認のほうに入らせてください。お手元のタブレットのほうでお願いをいたします。資料でございますが、議事次第、委員名簿、資料１として事務局の説明資料、資料２がＮＵＭＯからの説明資料、資料３として朽山委員の説明資料でございます。

加えて、参考資料１が、前回このワーキンググループで取りまとめました社会科学的観点に関する取りまとめ、参考資料２が、しばらく前になりますがこのワーキンググループの中間取りまとめということでございます。

タブレット端末の不具合等ございましたら、お手数ですけれども事務局の方までお申しつけください。よろしいでしょうか。

それでは以後の議事進行を髙橋委員長にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○髙橋委員長

よろしくお願いいたします。それでは議事次第に従って進めてまいりたいと思います。

本日の終了予定でございますが、10時を念頭に置いております。議事運営に当たって、委員の先生方のご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

本日の議題は、「科学的有望地に関するマップの提示に向けた検討事項」となっております。前回から少し間があきましたので、まず、経緯を振り返りたいと思います。

科学的有望地につきましては、技術ワーキングの検討が昨夏までに一旦取りまとめられました後に、パブリックコメントにおいてさまざまな意見が出されました。また、原子力委員会の評価報告書におきまして、幾つかの指摘をいただきました。それらを踏まえてどう対応するか、前回このワーキングで議論をいたしました。

その議論の結果、技術ワーキングに対しましては、要件や基準が一律機械的に過ぎないか精査をしていただく、さらに、表現ぶりもより適切なものがあれば改めていただくという趣旨で、検討を続けていただくことになりました。

技術ワーキングの検討は、いまだ継続中ということでございますが、ある程度の方向性が見えたというふうに伺っております。この点につきまして、技術ワーキングの委員長を務めていらっしゃいます杤山委員から後ほどご説明を頂戴したいと思います。

他方、本ワーキングにおきましては、科学的有望地のマップの提示後の進め方などについて、わかりやすい説明を準備するといったことが検討課題となっておりました。

このため本日は、まず事務局よりマップ提示の意味合いや、提示後の対話活動の進め方などについてご説明を頂戴したいと思います。その後、NUMOにも補足説明をしていただいた上で、最後に杤山委員からのご説明という形で進めてまいりたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、まず事務局から説明のほうをお願いいたします。

○小林放射性廃棄物等対策課長

ありがとうございます。お手元のタブレットでいきますと資料番号５、資料１の資料をあけていただければと思います。科学的有望地に関するマップの提示に向けた検討事項についてという、資源エネルギー庁のクレジットのものでございます。よろしいでしょうか。

１ページめくっていただきまして、検討事項の整理ということでございます。今、髙橋委員長からこれまでの経緯を若干振り返っていただきましたけれども、改めてその点、整理をしてございます。

昨年末に原子力委員会のほうから指摘を頂戴し、その他パブリックコメント等の声も踏まえまして、再精査という段階に現在入っているということでございます。このうち科学的・技術的観点からの検討は、技術ワーキンググループのほうで実施中ということでございますが、マップの提示がその後にきちんとつながっていくためにはどのような説明をしていくことが適切なのかということは、改めてこのワーキンググループで確認をしようということになっておりました。今日はその点を中心にご議論いただければと思います。

具体的には、１、２、３と左下のほうに水色の四角で書いてございますが、この３点をご検討

いただければと思ってございます。いずれもこれまでこのワーキンググループで議論をしてきたことでございますので、半ば再確認の意味合いが強うございますけれども、改めてということでお願いをいたします。

それから１点、敷衍いたしますと、ここでは科学有望地に関するマップというものを、このワーキングでは以後マップというふうに簡略化して説明をしていきたいと思います。

科学的有望地という表現そのものについては、この２年強の対話活動の中でも、さまざまな誤解を招く、いたずらに不安を持たせるというようなこともある、という声が挙がってきました。それから委員の皆様にもこのワーキンググループにおいて、しがたってしかるべく見直したほうがいいという意見も複数頂戴してきたということでございます。前回のワーキンググループでは、これは適切に見直そうという結論に至ったということでございますが、本日はそのことを踏まえまして、この審議のために便宜的にはマップという言い方で表現をさせていただければと思います。

戻りまして１点目がマップ提示の意味合いの再確認ということで、これは何の目的で、全体の流れの中ではどういう位置づけでその提示をしていくのかということが１点目でございます。

それから２点目が、これを提示した後にどのように進めていくのかということでございます。

それから３点目は、特にその提示後の中で、どのような中身について議論をしていくのかということでございます。前回もご指摘いただきましたように、この地層処分というのは科学的・技術的な側面もございますけれども、同時に社会的な側面もあるということでございまして、その後者のほうについて、きちんと議論を深めていくためにはどうしたらいいかということが３点目でございます。

ページを１枚めくっていただきますと、前回ご紹介をした原子力委員会からの評価、指摘を整理してございますが、これは前回資料と全く同じでございますので、時間の都合上飛ばさせていただきます。

もう１枚行っていただきまして３ページ目をお願いいたします。

上の箱に整理をしてございますけれども、この科学的有望地のマップと今まで言ってきたことに関しましては、一般的な反応としまして、有望地というものに選定されれば、そのまま調査ないし施設が押しつけられてしまうのではないかという不安の声が複数挙がってきたということでございます。

この点、そのようなものではないのだということについては、繰り返し対話活動を通じて発信をし、一定の浸透が見られるというふうに認識をしてございますけれども、引き続き多くの国民の皆様との間では、この点についての解消と正確な理解を求めていくということが極めて大事

だということでございます。

下半分に、これまでこのワーキンググループで整理をしてきたものを改めて表形式でまとめてございます。委員の皆様との間では、初めてのものは１つとしてないと思いますが、左側に、これが全体の中でどういう位置づけなのかと、それから何を目的とするものかというものを整理してございます。

特に一番左下を見ていただきますと、この地図を提示するということは、さまざまな要素を考慮しても、地層処分に好ましい地下環境が日本に広く存在するであろうという科学的見通し、これを共有し、地層処分についての一種の技術的な信頼性についての共有を深めていきたい、それから地層処分についての理解を深めていきたい、ということが大きな目的ということを確認してきました。他方で、右のほうに幾つかございますように、これはピンポイントでここしかないというものを示す、したがってそれによって施設の設置場所を決めにかかるというようなものではないかというような不安も引き続きあるということでございまして、右のほうには、そういうものではないというふうに説明をしてきたことを箇条書きで整理をしてございます。

こうしたことを、この先、繰り返し丁寧に周知をしていくことが大事であろうと考えてございます。

もう１枚ページをめくっていただければと思います。マップ提示の意味合いの再確認②ということでございますが、この提示をしていきますと、処分地選定がその先どう進んでいくのかということにもおのずと関心が高まる、それもこの狙いの一つでございますけれども、そういうことであろうと考えられます。

そのことに関しましては、処分地選定における科学の役割、それから段階的調査の必要性などを正確に伝えていくことが改めて大事になってくるであろうということでございます。

ポイントとして３つ下に書いてございます。１点目として処分場所を決めるには綿密な現地調査が必ず必要になるということでございます。２点目としてこの地層処分というものは、科学的にはここでしかできないというような性質のものではないということでございます。これもこのワーキンググループで確認をしてきたことでございますが、処分地選定というのは一定の安全上の基準がクリアされる地点を探す努力ということでありまして、最適地というものがどこかに存在するというようなことを前提に進めていくものではないということでございますが、このことについて、このマップの要件・基準づくりの中でどこまでのことができ、その先にどういうことをしなければならないのかということをしっかりと説明していく必要があるだろうと考えております。

それから、そうしたことを踏まえますと、だからこそと申し上げてよろしいかと思いますが、

できるだけ複数の地域に調査に協力をしていただいて、その先に進んでいくことが重要だということでございます。このための調査に協力いただける地域というものを、マップ提示を契機として地域対話を進めていきながらきちんと見つけていく。そのための努力を、国・ＮＵＭＯと連携をしまして進めていくということでございます。この点、３点目として整理をしてございます。

もう１枚めくっていただきまして、提示後の対話活動の進め方ということでございます。これも繰り返し確認をしてきたことでございます。

もう１枚だけめくっていただきますと６ページ、マップ提示後の対話活動の流れというのを参考でつけてございます。このワーキンググループで繰り返し議論をいただきまして、このようなイメージ図を作成し、我々もいろいろな場でこのことについて周知をしてきたということはご案内のとおりでございます。

このマップを提示したとしても、何かそれで大きく国と自治体の関係が変わるわけではなく、全国的な理解を得ていく取り組みというものは、基礎的、基盤的な活動としてしっかりと続けながら、その土台の上で一歩ずつ地域との対話を深めていくということを繰り返し申し上げてきたわけでございます。そして、このことについては、前回のこのワーキンググループでもそこそこが大事だということで確認をいただいたというふうに承知をしてございます。

１ページ前に戻っていただきまして、５ページでございますけれども、そうしたことの理解を前提にしつつ、しかしマップを提示いたしますれば、徐々に、ＮＵＭＯが中心になってということでございますが、地域ごとのきめ細かな対話活動というものも展開をしていくということになります。

この点につきまして、今、ＮＵＭＯとしては、国民の皆様の関心にもしっかりと応えて、信頼を得ながら対話活動を行っていくというために、その進め方を対話活動計画というようなものに整理をして公表していくという方向で検討中でございます。その点については、きょう骨子に近いものをＮＵＭＯのほうからご紹介をいただきまして、そういうものをつくるとすればどのような内容にしていくことが適当かということをご議論いただければありがたく存じます。これは後ほどＮＵＭＯからよろしくお願いしたいと思います。

それから７ページ目のほうに進んでいただいてよろしいでしょうか。

提示後の対話活動の進め方②ということでございます。今ご紹介申し上げたのは、ＮＵＭＯそれから国として地域対話、全国対話をどうやって進めていくかということでございましたけれども、このことについては、国・ＮＵＭＯが自ら対話活動を供給するというだけではなくて、いろいろな方にそれに応えていただく。それから国・ＮＵＭＯの取り組みにかかわらず、全国の、広く各地で自主的な取り組みが広がっていくということが何よりも大事というふうに考えてござ

います。そうしたことで、日本隅々でこの問題の解決に向けた前向きな取り組みが生まれてくるということを理想として考えているということでございます。

このためマップ提示後は、我々のシンポジウム等への参加を呼びかけるだけではなくて、さまざまな主体の自主的な活動を促して、成果の相互共有、それからそうした成果を多くの方々へ発信していただくというようなことを促す方向を重視していきたいと考えてございます。これはおかげさまで、これまでの数年におきましてもこうした取り組みが着実に広がっているというふうにご紹介できると思います。

後ろのほうに参考で幾つか事例の紹介というものをしてございます。ページが飛びまして恐縮ですが、11ページ目のほうを開いていただいてよろしいでしょうか。団体の取組事例ということを、このページ以降、数ページにわたってご紹介をしてございます。

幾つかの団体につきましては、国ないしＮＵＭＯのほうから一部その活動費などを支援したところがございます。それからそういうものと関係ないものもございます。いずれにしましても我々のほうにこういう成果が上がったということでご報告をいただいている団体の中のごく一部をご紹介しているものでございます。

例えばこの11ページを見ていただきますと、このＮＰＯ法人、全国組織のマミーズサミットというものがございます。これは子育てをされているお母様方の団体、各地の団体を全国組織でアンブレラ的につないでいるような団体でございますけれども、したがってふだんの取り組みとしては、地層処分とかエネルギーということではなく、日々の暮らしのいろいろなことについて取り組みをされているということでございますが、ご縁がありまして、今回、地層処分についてもそうした中での一つの活動として取り上げていただいたということでございます。

多くの方々、地層処分には今までなじみがない方々でございましたけれども、そうした方々がこの問題に関心を持って、今後も取り組みを続けていくというようなときに、どのような説明の仕方から入ることが適当かというようなことを皆さんでご議論いただいて、一種のパンフレットみたいなものをつくって、自主的に広げていくというようなことで取り組んでいただいているところでございます。

この問題について詳しく知識を得ている人と、初めて触れたというような人では、最初の入り方についてもどういうことが適当かというのは随分違うということが下のほうに少しご紹介があります。やはり初めて知った方同士でどういうコンテンツをつくっていったらいいかということを検討すると、そういう方に訴求するようなものがうまくできるというようなことでございまして、そうしたことをいろんな人に横展開していくようなことにつなげていこうというふうに考えていただいています。

次のページ以降も似たような取り組み、各地域でのお母様方の団体が地下研究所の視察などをしたりしながら、この問題について議論を深めていき、お母様方のネットワークの中で広めていくというような取り組みをされているものがございます。

もう１ページめくっていただきますと、原子力発電所の立地地域の方々が、都市部の大学の方、学生の方たちと交流を深めながら、ある種の電気の生産地と消費地の間でこの問題について議論をしていくというような取り組みを自主的にやられているような方もいらっしゃるということでございます。

以降、時間の関係上、個別の説明は省略をさせていただきますけれども、いろいろな大学生、それから高校生、場合によっては中学生、そうしたところとの間でこの問題、将来世代に大きくかかわる話だということで、授業に取り入れていくというようなことで取り組まれている学校ないし教職員の方々が各地で多くいらっしゃるということでございます。それから、そのツールといたしまして、例えば学生がなじみやすいような一種のｉＰａｄなどで使えるゲームなどを開発するというようなことで、これも横展開していただいているような取り組みがございます。

申し上げたかったことは、こうした芽が全国で着実に出てきているということでございます。我々はこうしたことを適切にサポートして広げていくということに努力を傾けていきたいということが先ほど申し上げたことでございます。それぞれの活動は、自主的な活動として取り組まれているところでございますけれども、そうしたことが同じ地域の方々の中でもなかなか知らない、気づかないということが多々あろうかと思います。そうしたことをうまくつなげていくことで、自分の地域、もしくは周辺地域にもこの問題について真剣に考えていらっしゃる方が多くいるというような状況をつくっていって、日本全体でこの問題についての取り組みが本格化し、これをどうやったら実現できるだろうかというような議論につながっていけばなというふうに考えているところでございます。

ページをもう１枚進めていただきまして、８ページでございます。駆け足で恐縮です。

この対話の輪というものをどうやって全国に広げていくかということを今申し上げましたが、その中でどのような中身、内容、コンテンツを扱っていくかということが、このページ以降で整理をしているところでございます。

これはむしろ委員の皆様からご指摘をいただいたことですが、科学的・技術的側面というものはしっかり研究もし、そのことについての理解も求めていくということでございますが、それと同時に、これは社会において施設を建設し、一定の地域に受け入れていただくという非常に社会的側面の強いものでございますので、そのことについて実現をしていくためにはどうしたらいいのかという視点で議論を深めていくということが大事だということでございます。

その中身としては、例えば地域共生というものをどうやって図っていくか。それから他の地域も巻き込んだ国全体としての地域支援というもののあり方などにもおのずと議論を向けていく必要があるということでございます。

「そのためにも」ということで、真ん中に書いてございますが、実施主体たるＮＵＭＯとしては、埋設後の話だけではなく、建設・操業時の事業自体の姿をしっかりと示す。それからそれを受け入れていただく地域というものが将来出てくれば、それがどのような姿になっていくのかというようなことについても具体的なイメージを持っていただけるよう、情報提供の内容を充実させていくことが重要であるというふうに考えます。

また、これは国も一緒になってということでございますが、この社会的側面というものをもう少しかみ砕いて、多くの人の理解、賛同が得られるような方向で議論を深めていきたいというふうに考えております。

ページを１ページめくっていただきますと、９ページですが、幾つかの観点を整理しています。

１つ目は、受入地域とその他の地域との関係性ということですが、いずれかの地域が、この処分問題の解決という社会的価値の実現というものを認識して、それから自分の地域の将来のためにということで事業の受け入れを検討していただけるとすれば、社会として大変ありがたいことだという認識が広く全国で共有される必要が引き続きあろうかと思います。

そしてそのために、このワーキンググループでは敬意や感謝ということで表現をしてきましたが、その具体として、国・ＮＵＭＯ、電気事業者等が協力をして、持続的・総合的な支援を行っていく必要があるということは繰り返し浸透させていく、理解を共有していくということが大事だと考えております。そのときの具体化ということまで議論が深まっていくことが、今後大きく期待されるところだと思います。

読み上げませんけど、以下に５点ほど整理してございますのは、このワーキンググループで昨年整理をいただいた、恐らくこの先こういうことが重要になるだろうという視点でございます。こうしたことも今後の対話活動の中ではきちんとお伝えをして、どのように考えるかということの議論を深めていきたいということが１点目でございます。

それから残り２点、地域と事業の共生可能性、それから事業としての実現可能性という観点も書いてございます。この事業を受け入れたときに、それが地域の将来像にどういう影響を与えるか、どれだけプラスのことにつながっていくかということについては、しっかりとその地域で考えていただくことが大事ということでございます。

これはＮＵＭＯ、それから国として、その検討を適切にサポートするということが求められるということでございますが、まずこの観点というものとして、共生可能性ということが大事に

なってくるということは、今後、多くの方に伝えていくべき大きな点だと考えます。もう１点、実現可能性ということも同様にというふうに考えるところでございます。

こうしたこと、我々の対話活動でもそうですし、先ほどご紹介したような自主的な活動の中でも議論が深まって、共通認識というものが形成されていくことを強く期待するところでございます。

それに関連しまして、最後10ページでございますが、そうしたことの検討材料として、今までもこのワーキンググループ、それからこのワーキンググループの外でもいろいろな方にご協力をいただきながら、検討材料の具体化ということをしてきましたが、より一層その協力の幅を広げていきたいということでございます。

研究テーマ例として幾つか、地域経済への影響であるとか、権利義務関係であるとか、住民参加であるとか、そういうことを書いていますが、こうしたことについてＮＵＭＯを中心に次年度から多くの人の協力を得て研究の充実を図っていき、その成果を国民の皆さんと共有していけるように、継続的な複数年度にわたる事業としてこれをスタートさせていきたいと考えております。その際には、真ん中のほうに書いていますが、研究の自律性ということに注意をしながら進めていきたいというふうに考えるところでございます。

私のほうから３点、以上ご説明とさせていただきます。ありがとうございます。

〇髙橋委員長

ありがとうございました。ただいまの説明につきまして、ＮＵＭＯのほうより補足を頂戴したいと思います。よろしくお願いします。

〇近藤理事長

おはようございます。ＮＵＭＯからは、対話活動について今日は資料を用意しましたので、担当の宮澤理事から説明させます。よろしく。

〇宮澤理事

ＮＵＭＯの宮澤でございます。それではお手元の資料でございますが、科学的有望地に関するマップの提示後の活動についてという資料に基づきましてご説明を差し上げたいと存じます。よろしくお願いいたします。

まず１枚目でございます。これまでの対話活動ということで、これは若干の振り返りと、今、注力しておりますことに関して、３つの色分けした上の図でございますが、柱として掲げさせていただいております。

それぞれこういったものに私ども取り組んでおるわけですが、下の四角の中の真ん中の部分でございますが、特に皆様からのこういったものを通じまして得られたご関心とか、ご質問につ

きまして、Ｑ＆Ａをホームページにきめ細かく掲載したり、あるいは、大規模なシンポジウム形式による説明会ではなくて、きめ細かなご意見が拝聴できる、あるいはツーウェイでやれるような車座での意見交換会を地層処分セミナーと称しまして今現在も開催中でございます。そういったことで工夫を重ねながら、いろんな形で対話活動を展開しておるのが実情でございます。

こうした中、国による科学的有望地に関するマップが提出されれば、さらに幅広い国民の皆様の関心を持つことを大いに私ども期待しておるところでございます。それにあわせまして国民の皆様からの信頼を得てこういった活動を進めていくためにも、冒頭、小林課長からもございましたが、対話活動計画というものを策定し、マップの提示前にそういったものを公表してまいりたいと考えておるわけでございます。

１枚おめくりくださいませ。では、そうした対話活動計画の骨子でございますが、視点としてこんなようなことを考えているということでございます。

まず１点目は、地層処分の安全性、あるいは必要性の理解促進、これは今までどおりのことでございますが、広く全国でこういったものに関しまして対話活動を展開してまいりたいと。それはとりもなおさず、原子力発電を利用してきた私たちの世代の責任として、社会全体で解決していく必要性があることについて理解の輪を広げてまいりたいといったことが１つ目の柱。

２点目は、多様な形式での広報・対話活動をさらに展開してまいるということで、これは広く国民各層のご理解をいただくために、マスメディア広報やウエブメディアというものは当然、そういったものに加えまして、人が集まりやすり場所に出向いていっての直接的な広報活動、あるいは先ほど申しました車座での意見交換会をより密度を上げて展開してまいりたいというふうに考えております。その際、対象となる方々の関心や内容や知識の多寡に応じた効果的な内容、つまりお客様の目線に合わせたような効果的な内容となるように努めてまいりたいというふうに考えております。

また、ＮＵＭＯが呼びかけるだけではなく、やはり国民の皆様による主体的な学習活動を喚起し、その成果を多いに共有してまいりたいといったような視点も考え合わせているところでございます。

３点目といたしましては、議論の内容をさらに充実してまいりたいということで、特にこの事業の地域社会や自然環境などに配慮し、どのように地域と共生を図っていくかという視点も持ち合わせてまいりたいということでございます。

こうした活動を通じまして、一人でも多くの方々に処分事業に対するご関心を深めてもらいたいというふうに考えておるわけでございます。

次のページをお願いいたします。その次の柱といたしましては、やはり地域ごとのきめ細かな

対話活動を展開してまいりたいということでございまして、全国で広く対話活動を展開する一方、地域ごとのきめ細かな対話活動を行ってまいりたいと。その中で、特に地域に根差した活動を行っている団体等に主体的な学習活動を行っていただけるように呼びかけをしてまいりたい。

それから、この事業は長期にわたり地域との信頼が不可欠でございます。したがいまして、こういったものを進めるためには、マップ上のより適性が高い地域で重点的に対話活動を進めてまいりたいというふうに考えております。

最後でございます。地域における主体的な学習活動の支援と拡大ということでございますが、今現在も主体的に学習活動を行っていただける地域の団体様はたくさんいらっしゃいますが、今後はどのように地域と共生を図っていくのかという視点につきまして、私どもの考え方も具体的に示させていただきながら、一緒になって地域の将来ビジョンというものを考えてまいりたいというふうに考えております。このような議論の深まりとあわせまして、こういった活動が地域全体に広がっていくことを大いに期待しておるところでございます。

こうした活動を通じまして、地域住民の方々のご理解やご協力を得た上で、できれば複数の自治体で同時期に文献調査に入らせていただければということを念頭に申しながら、積極的に活動してまいりたいというふうに考えておるわけでございます。

以上でございます。

○髙橋委員長

どうもありがとうございました。

それでは続きまして、杤山委員からご説明を頂戴したいと思います。

○杤山委員

杤山です。きょうは資料の３をおあけいただければと思います。この内容でございますが、まだ技術ワーキングで特に確認されているということではございませんけれども、さまざまな作業を通じまして、おおむね全体の方向性というのが見えてきたということでございますので、私個人の理解としてその方向性をあらかじめ紹介させていただければと思います。

昨年の秋から、総論、各論の両面でこの報告を精査してきたわけです。分野ごとにそれぞれの委員の方々に検討していただいておりまして、その内容ということになります。

中身的にはどうしてもいろんなところで割り切りが必要な話がございますけれども、逆にそれを割り切ることでいろんな誤解も生じてしまうということについて、どんなふうにすればいいかということで我々悩んできたということでございます。

このワーキングでも、国民や地域の目線で一律機械的になり過ぎていないか、誤解や不安を招くところがないかということをもう少しきちんと見てくださいというふうに言われております

ので、そのようにしたということでございます。

１ページ目でございますが、地層処分技術ワーキングのこれまでの検討成果について、対話活動やパブリックコメントの中で示された国民等のご意見を踏まえて、マップの提示により国民に伝えたいことが正確に適切に伝わるように改めて精査しているところということでございます。

検討課題でございますが、この四角の中にございますように、前回の技術ワーキングで確認された内容としては、１番目は、安全確保上は重要な考慮要素であり、一般的に国民の関心も高いけれども、検討の中では要件・基準には入ってこないような事項として、地震の揺れでありますとか、津波の問題、地下水の問題、こういうものがありましたけれども、そういうこともなぜ入ってこないのかというようなことについてのわかりやすい説明を加えるということをいたしました。

それから２番目は、要件・基準について、一律機械的になり過ぎないようにという視点から改めて精査し、リスクの性質や程度の違いを適切に反映させるということをいたしました。これは実は３とも少し関係がございますけれども、いろんな形でリスクの性質とか程度に違いがございますけれども、それを十把一絡げにして適性があるとかないとか、有望であるとか有望でないという表現をすることによっていろんな誤解が生じるということがございますので、それをきちんと説明させていただけるように検討中ということでございます。

それから３番目は、１番目と２番目の話を加えて、この表現がよりよい表現になるように説明を加えていったということでございます。

次のページをごらんください。１番目の項目ですけれども、地震と津波と地下水というのがございます。これは実際、調査の中でしっかりと確認することになるんですけれども、今回のマッピングの要件・基準の設定には適さないものとして書いてございます。

時間の関係で、例えば２番目の津波というのをごらんいただくと、津波というのは、処分場の坑道をふさいだ後は、津波の影響は心配しなくてよいということがございます。それから、建設・操業期間中は特に気にしておく必要はありますけれども、施設への津波の流入を防ぐための工学的な対策をとることは十分に可能であると。例えば坑道の入り口を高台に設置するとか、そういうことをすれば十分ですよということで、こういう理由によって要件・基準には入っていないんですよということをきちんと報告書の中で説明をするというようなことをしてございます。

次のページをごらんください。次のページはリスクの性質と程度の違いを適切に説明するということでございます。

１番目の黒ポツに書いてございますのは、精査の方向性ですけれども、①が短期の建設・操業中の数十年にわたる期間におけるリスクの問題と、それから埋設後の長期にわたる安全性の問

題、これの違いをきちんと説明するということ。それから、②が地下環境の長期の安全性と、人間侵入の回避、それから輸送の安全性などの観点の違いということでございます。それから３番目はリスクの程度の違い。こういうものについてきちんと説明をしていくということでございます。

２番目の黒ポツに書いてございますのが、②の長期の安定性と人間侵入の違いのところであります鉱物資源の問題です。鉱物資源として、ここでは油田、ガス田、炭田などを考えたんですけれども、こういう地下に有価物があると、遠い将来においてそこにそういう危険なものがあるという情報が失われてしまって、人間がそこを掘削してしまって処分施設を破壊してしまう、それによってリスクが高まるというようなことがございます。そういうような人間の掘削を誘引し、人間接触のリスクを高めてしまうかもしれないという可能性を考慮しようという形で、鉱物資源を避けるというのがございます。

これは地下環境の長期安定性、科学的特性に懸念があるということとは全く別の話ですので、この点は地層処分という概念を理解してもらう上で大事な点であり、両者の違いをわかりやすく分けて示すことが適当と考えてございます。

この将来の採掘のリスクが高いかどうかというのは非常に難しいんですけれども、地下の資源の経済的価値による、鉱物資源が存在すると一口に言っても、どれぐらいの確からしさで、どの程度のものが存在するかはそのデータをよく見て、その違いをマップに適切に反映すべきであるということでございます。

それから３番目が、こういうものを全部まとめて地域特性の区分に関する表現をしたときに、誤解が生じやすいような表現になっていないかということでございます。

パブコメ等でも、段階的な調査を経て適性が確認されたわけでもないのに、適性があるとか、高いとするのは言い過ぎではないか。輸送のしやすさだけを理由に、より適性が高いとすることは、本来最も大事な地下環境の長期安定性を軽視しているかのように見えないかというようなことがございました。

今回のマッピングでどこまでのことが言えるか言えないか、できるだけ正確な表現になるように、今後の技術ワーキングにおいて改めて整理し直す予定でございます。

今回のマッピングは、個別地点ごとの調査の手前の話であると。既存の全国データから地域の特性を示して、地層処分という概念に親しんでもらう材料を提供しつつ、将来の調査に向けた見通しを示そうとするものなので、そのようなマッピングで言えることはおのずと限界があり、それを正確に表現しようとすれば、例えば以下のように、適性が低いとか、あるとか、適性が高いというような一元的な表現にしてしまわないで、やはり「適性が低い」のかわりに、「好まし

くない特性があると推定される」と。それから「適性がある」というのも、「好ましい特性が確認できる可能性が相対的に高い」。それから「より適性が高い」も、実際は輸送面だけで話すので、「輸送面でも好ましい」と、こういう表現にするようにしたほうがいいのではないかというふうに考えてございます。

昨年の夏までの時点で、適性が低いと整理した範囲というのは、安全な地層処分が成立すると確認できる可能性が相対的に低いのであって、この範囲の中でも地層処分に適した地点を確保できる可能性まで否定されるものではないと。それから逆に適性があると整理した範囲も、安全な地層処分が成立すると確認できる可能性が相対的に高いだけであって、この範囲の中でも地層処分に適さない地点は存在するということがございます。この点をはっきりさせておかないといけないということでございます。

昨年の夏の時点では、このような認識の上で、なお必要な処分地選定調査を実施主体が効率的かつ着実に進めていく観点から、適性が低い範囲は処分地選定調査の対象とはしないと整理してきたわけでございますけれども、この点は今後の技術ワーキングの取りまとめの後に、改めてこの廃棄物ワーキングでご確認いただければと思ってございます。

なお、前回の廃棄物ワーキングでの指摘として、科学的有望地という表現は見直すべきということを踏まえまして、地下深部等の科学的な特性を全国マップの形でわかりやすく情報提供をするという趣旨に照らして、技術ワーキングでは、科学的有望地の提示ではなく、地域の科学的な特性の提示、あるいはマップの提示というふうに表現することとしたいと考えてございます。

これが現在までの技術ワーキングの検討の旨の方向性であろうかと思います。

次のページに補足として書いてございます。これは実は技術ワーキングの内容というよりは、全く別な話として、私の個人的な意見として、マップの提示でいろいろ議論してきたわけですけれども、何が問題でこういうことが起こっているかということについて少し考えてございますので、これについて少し紹介させていただければと思います。

マップの提示は、このマップの提示をきっかけとして地層処分に関する理解を深めたいとの意図であります。それにもかかわらずマップの提示は一部の地域を最適地として抽出し、そこに国が押しつけることを意図しているというふうに捉える向きがございます。これを批判する人もございますし、これに期待する人もあるということがございます。

これは、どこか場所を決めて、そこへ廃棄物を持っていって終わらそうということを考えているんじゃないかという誤解から生じていて、このような誤解が処分場の立地問題の解決を困難にしていると思われます。

もともと高レベル放射性廃棄物は、私たちの日々の活動に必要なエネルギーを得るために発

生したもので、人間のあらゆる活動にはエネルギーが必要ですので、この廃棄物は社会全体が生み出したものというふうに考えることができます。処分場の受け入れは、その地域が将来にきれいな環境を残し、持続的社会を築くための仕事を社会にかわってするということを意味してございます。

その意味では、そのような地域に対して感謝を示すとともに、当然ながら対価を払っていただくといった考えが必要であると。またそのときには廃棄物を対価と引きかえに危険なまま押しつけようとしていると捉えられてしまうことは避けなければいけませんので、そのために十分に安全確保が可能なものであるということを示すということが、いろいろな科学的な議論の中でなされている意味で重要であるということでございます。マップの提示の意味をきちんとわかっていただくということの中には、こういうことが入っているということでございますので、それを常にセットとして訴えかけていかないとなかなか話が通じないのではないかということでございます。

要は、この社会問題の解決のために、いずれかの地域に、公共の仕事として一緒にやっていただきたいのだということをまずわかってもらうということを、いつもマップの提示とともにこの意味をきちんと伝えながら出していければ、もう少しものが伝わりやすいのではないかというふうに考えてございます。

以上でございます。

○髙橋委員長

どうもありがとうございました。

それではただいまの事務局、ＮＵＭＯ及び杤山委員からのご説明につきまして、ご質問やご意見のある方はネームプレートを立ててご発言を頂戴したいと思います。いつものことでございますが、おおむねお一人方３分をめどにご発言を頂戴したいと思います。いかがでしょうか。

それではまず辰巳委員、よろしくお願いします。それから崎田委員、どうぞ。

○辰巳委員

ありがとうございます。今までのワーキングでの取り組みの総意だというふうに思っておりますが、すごくひっかかっていることが一つありまして、これを言ってしまうと困るかもしれませんが、とりあえず私自身が今思っていることなので申します。何度もマップ提示という単語が出てきたり、今回もマッピングという言葉がいっぱい出てくるのですが、そのマップの提示なりマッピングというものに関しての説明が、どういうスケジュールで、誰がどういうふうに行うのかということに関しては全くわからないままで、提示後どういう活動をするかとかいう話ばかりが出てきています。それはそれでよろしいんですけれども、その一番大事なところが全然わから

ないままに、マッピングがあるということで、非常にもやもやとしております。説明していただける限りで結構ですので、どういう状況なのか、誰がどういうふうに、いつごろにやってくださるのかという辺りをここでお話しいただきたいなというふうに思っております。それが１つです。

それからあとは、事務局からご説明いただいた資料の２ページのところに、原子力委員会からのこれに対するご意見等があった中で、最後のところに書かれている、アンダーラインがいっぱい引かれているんですが、アンダーラインの引かれていないところで、検討状況を国民に説明するという書き方があって、ここがすごく重要だというふうに思っております。

もちろん国やＮＵＭＯさんがいろんな取り組みを説明しながらやってくださるということはよくわかっているんですが、もう少し先のような状況をちゃんと説明していくというか、ここの検討状況を説明していくということ、そして理解を進めていくということが、すごく重要かなというふうに思いました。

ＮＵＭＯさんに対しては１つだけですが、２ページのところで、いつも嫌なことばっかり言うから嫌われているかというふうに思いますが、１つだけどうしても気になるので。下から３行目に書かれている言葉ですが、どのように地域と共生を図っていくのかとか、どういう自然環境に配慮していかなきゃいけないのかという点の紹介と書いてありますね。これはやっぱり誰かが知っていて、それを教えてやるという感じの言い方に私には聞こえてしまうんですね。

こういう自然環境の配慮とか地域との共生というのは、相互に話し合う中から生み出されることもあります。もちろんある指示も必要かもしれないですが、最初から紹介を充実させるっていうのは、一方的なイメージを私は持ちましたもので、おっしゃっていることはとてもよかったのですが、本当に一緒に考えていきましょうということがわかるようにやっていただきたいなと思いました。

以上です。よろしくお願いします。

○髙橋委員長

どうもありがとうございました。

それでは崎田委員、お願いします。

○崎田委員

ありがとうございます。私は最初にこの問題に関して全国でワークショップなども開催してきた経験があるものとして、素直に感想をお話ししようと思いました。

杤山委員がお話しされた最後のページのところに、マップ提示の意義についてという内容がありますが、私は技術ワーキングの皆さんがその意味について、どういうふうにきちんと社会に伝えなければいけないのか、そこがとても大事だということをお感じになりながら意見交換をさ

れたんだというのが大変強くわかりました。

それでマップ提示の意義について、きちんと社会に伝えていくためにどういうところを配慮しなければいけないのか考えるのは、実はこちらのワーキングの役目だと思ってやってまいりましたが、やはり技術的なご専門家が考えていただいたことと、それを社会に提示したときに、みんながそれももとに学び合っていこう、あるいは意見交換していこうという雰囲気をしっかり起こしていくにはどう準備したらいいのかという、その基盤のところを意見交換して明確にしていくために、こちらのワーキングと、技術ワーキングの両方が連携していくことが大変重要ではないかということを率直に感じました。それが杤山委員のお話のまず感想です。

なお、その前のいろいろな、マップ提示後にどのような話し合いを起こしていく必要があるのかというようなことに関して、今回初めて全国各地でどのような対話活動が実践されているのかという具体例を示していただきました。初めてごらんになる方にとっては、こんな対話の場がもうあるのかと驚かれた方もいらっしゃるのではないかと思います。地域ワークショップの企画実施などいろいろやってきましたが、資源エネルギー庁のシンポジウムや地域対話とか、ＮＵＭＯのシンポジウムや意見交換会などに参加をされた方で、初めてこういう課題が社会にあったということに気がついて驚かれて、自分の取り組んでいる地域での勉強の場の中でこのテーマを扱ってみたいと思われる方は意外に大勢、大勢というのも言い過ぎかもしれませんが、意外にいらっしゃるというふうに感じています。そういう方たちにやはり的確に情報を伝えていただき、勉強会の開催を支援するということをしていただくことが大事だと思っております。

ですから今後、このマップの提示があってから、そのマップで何色に自分の地域が塗られているのか、色の違いではなくて、全国各地でまずはこういう社会問題に関して勉強会を企画実施していただくことが大変重要だと思います。そのためにも私は、この資料にもあるような、地域で社会教育活動とか、生涯学習活動、環境活動、エネルギー学習、省エネ活動、消費者活動、そしてまちづくりや学校の出前授業をやっておられるとか、いろんなタイプの社会活動に関心のある方が、この高レベル放射性廃棄物の処分に関するわかりやすいパンフとか情報に出会えるような状況をきちんと整備していただく、それがまず基盤として大変重要なのではないかというふうに思っております。

そういう基盤情報を整備していただいた上に、今度は自分たちがきちんと見学会もやってみたいとか、仲間に呼びかけてしっかりとした学習会の企画をつくりたいというところには公募制などで費用も支援していただくというような段階を設定していただくのが大変重要だと思います。一口に対話活動の支援といってもいろいろな規模とか段階があると思いますので、柔軟に検討していただければありがたい。

先日、そういう対話活動を自分で実施したことがあるという方たちの会合がありまして、私もそこに参加をして気づいたんですが、そういう方たちは結構、内容の企画だけでなく参加者を集めるのに苦労したりしておられて、ほかの地域でどんなやり方をやって、よかったのか、悪かったのか、そういうようなことを共有したいとか、そういう思いが非常に強くなっておられる方が多いというふうに感じますので、やはりこういう対話活動を経験した人たちのその後をきちんとフォローしていただく、そういうところをしっかりとやっていただくことが大事なんではないかと思っております。

各地でのそういうような勉強会や対話活動が起こっていく中で、徐々に時間の経過の中でどういうふうにそれを全国的に展開していくか、収束していくかというのは、今度は次の段階が見えてきたら、またＮＵＭＯさん含めて、こういう場でしっかりと意見交換することが必要なんではないかと思います。

そういう意味から言えば、ＮＵＭＯさんの対話活動計画を事前に出していただくというのは大変重要だと思いますが、いろいろな活動がどのくらいの時間の経過、あるいは社会の状況を考えるのかというのは重要で、結構時間の経過が必要なことが１ページに簡単にぱっと書いてあったりしますので、その辺の計画をつくるときの全体像を、時間軸とか内容軸、そして全国あるいは一部の地域とか、何かその辺の状況が誤解なくしっかりと伝わっていくような形で、対話活動計画をまとめていただくとありがたいと思います。

よろしくお願いします。

○髙橋委員長

どうもありがとうございました。

それでは伴委員、お願いいたします。

○伴委員

ありがとうございます。資料１についてですが、マップ提示後には地域を重視して、対話（広聴）等々をしっかりとやっていくんだという基本的な方向性はよいことだというふうに肯定的に理解をしています。

とはいえ、このマップの提示が、それで場所を決め打ちするものではないとかいう、３ページに書いてあるまとめというのはそのとおりというふうに思って異論はないのですが、一方そのマップはある程度絞り込みをしていくということも、これもまた事実なわけです。マップ提示は議論の出発点というようなことも書かれていますけれども、議論の出発点だけれども、一定程度の絞り込みというものをするんだということはやっぱり押さえておくべきだと考えています。

それから、やや細かい言葉のことですけれども、例えば１ページの科学的・技術的観点から

の検討は、地層処分技術ワーキングで検討中となっているんですが、地層処分技術ワーキングで検討しているのは地球科学的技術的観点であって、社会科学的なところは検討対象外になっているわけですので、一般論としての科学的というような言葉でやっていくと少し曖昧になってしまうところがあるので、言葉の使い方は丁寧にお願いしたいと思います。

もう一つ、国・ＮＵＭＯという表現があるんですけど、国とＮＵＭＯが一体ではないわけですし、原子力委員会では、国（経産省）のほうの説明というのは監督官庁としての役割を十分に果たしていくというものだったわけですので、余り一体感を持たれないように書いてほしいというふうに思います。以上です。

それから２つ目のＮＵＭＯのほうの資料なんですが、これはこれから活動計画を立てられるということのようですが、資料のタイトルは活動方針というふうになっていて、資料を読んでいても方針なんですよね。

しかし、資料１の経産省の資料にも、ＮＵＭＯの資料にもある活動計画を出すとなっています。計画というのはもっと具体性のあるものを普通はイメージします。その活動計画というものはどういうふうなイメージを持って理解したらいいのか、この資料を読んでいてもちょっとわからない。活動計画が出されたときには、例えば重点的な地域活動を今年度は何カ所でやるとか、例えばそういうふうな具体的のあるものとして計画が出てくるのかどうかとか、もう少し方針を超えて計画のイメージがつくようなことを補足的に説明していただけないでしょうか。これが資料２についての意見です。

それから資料３についてですけれども、この中には、この放射性廃棄物ワーキングで科学的有望地を見直すべきという意見があったという書き方になっている、４ページの下のほうですね、そうなっているんですけれども、私の理解では、このワーキングでは見直すべきという指摘のような結論に至ったことはないというふうに思います。

そもそも第28回のときに、このワーキンググループは、技術ワーキンググループの報告書を基本的には了承しているわけです。その後、第29回で技術ワーキングの朽山座長のほうから見直したいという意見があって、それはそのように進んでいっているという理解ですけれども、廃棄物ワーキングで見直すべきというふうなことを決めたことはないと思いますので、最終的報告書をまとめられるときには注意していただきたいと思います。

したがって、別に私は見直すことに文句を言っているんじゃないんです、見直しに至った経緯というものをわかりやすくというか、きちっと説明を書いてくださいということです。でないと、一旦了承しているのにまた見直しに至ったその経緯は何だったのかと、余計疑問が深まるようなことは避けたいというふうに思っているわけです。

３つ目は、言葉を言いかえても内容が変わらないわけですから、マップのときの条件、要件というものは変わるわけがないわけです。そしてこれまでの流れとしては、そういう言葉を使っているんですよと理解を深めるようにいろいろ対応してきたと思うんですけれども、見直すのはいいんですが、見直した結果、余計わかりにくいような、やわらかく表現した結果、余計わかりにくいような形になるのはまずいんじゃないかなという、個人的な意見を持っています。

以上です。

○髙橋委員長

どうもありがとうございました。

今まで６人手を挙げていらっしゃいますので、その方６人のご発言をいただいてから、議論をまとめていきたいと思います。

それでは新野委員、お願いいたします。

○新野委員

ありがとうございます。もう既に発言された委員さんと随分重なる部分があるかとは思うんですが、私なりに意見を述べさせていただきたいと思います。

手を挙げるきっかけになるのが、杤山委員の最後のまとめのところからなんですが、技術的なことはいろいろ検討はしてきたけれども、考え方を示して認識が広まることが重要であることを念頭に置かれて、文言の修正をされているんだなと理解をしました。とてもすばらしい姿勢だと思っています。

それに関連しまして、エネルギー庁さんの資料１の６ページ目の図式ですが、これはＮＵＭＯさんが示された図ということです。これも何回か提示はされていますけど、マップ提示というのが何か最大の山場のように、ここ１年ぐらいずっとイメージ的にはあるのですが、都会からちょっと離れたところに住んでいる者とすると、マップ提示というのは経過の中の重要なポイントではありますが、終着点でも何でもないと認識しています。

国民の方にもぜひそうご理解いただきたいと思うのですが、マップが提示されたから何かいいことがある、悪いことがあるということではなく、これまでがやや集約をされて、多くの人々の理解のもとスタートを切りたいという意思表示のように解釈しているのですが、それについては、前後の経過が非常に重要だと辰巳委員がおっしゃっているんだろうと思いますが同感です。

突然、国民がこの山場の説明を聞いたところでわからないということになるので、このマップ提示がどうしてされるのか、この後どうしていきたいのかということが、提示を機に関心を持っていただく前後の説明で、国民やこれまでかかわらなかった方たちに十分に示されないと、このピークを迎える一つのチャンスを逸してしまうのではないかと思いますので、このタイミング

は重要な時点だという認識を持っています。

これまで私どもは片輪としてひかえている間、杤山座長の技術ワーキングが精力的にまとめたり活動していただいてきたわけですけれども、福島の事故以前は、技術的な側面が、これまで日本での説明の中心にあったわけですが、社会的なものも重要なんだ、冷静になってみれば両輪必要であって、両方なければ物事が進まないという認識が国民の中にもかなり広がってきていると思うんです。そうなると、このマップ提示後、具体的な地域が出てくるまで社会的な側面をどういうふうに認識したり、捉えていくべきかということが、国民との共有の情報になっていかねばならないと思います。

そして今回、資料の後半のところで具体的な事例が何件か紹介されています。内容は今までも何回か読ませていただいたり、私も参加したこともあるのですが、今回のものは地域の会合を持たれている方たちの進め方がこれまでより進んでいる、進化しているなと感じ取れました。ただ勉強したり見に行ったりするだけではなく、きちんとした目的意識を持って議論をし、しかもその議論の仕方もかなり研究されていて、それを目的意識を持ちながら何かに生かそうという姿勢が垣間見れるようなグループ活動が幾つも点在しているということの実例がここで示されたということで、明るい先を示されたなと思いました、そしてこれまではエネルギー問題をいろいろ勉強されている地域の方々が多く関わられてきましたが、この度の国民的議論ということは、生活者であるところの広い視点を持たれて活動している方々に、より一層踏み込んでいくことが重要であると思っていましたので、この取り組みはすばらしいし、ＮＵＭＯさんも以前の報告より随分充実されたまとめ方や手法を取られているなと期待の目で拝見をしました。

この中には多分いろいろな合意形成の仕方のヒントが隠されていますので、もっと深掘りをして、こういう方たちとのかかわりとその連携の研究がさらに深まることが、このマップ提示後に重要なことかと思います。

当ワーキンググループは技術とはちょっと切り離して、同じ課題をみつめながらも両輪の片側として置かれていたように思うのですが、マップ提示後はやっとこの委員会の本質的な目的に添う仕事をさせていただけるのだろうと思います。この提示の図式の中には大まとめで前進する姿はあるのですが、時間軸が全く入っていません。期待的時間軸というのが今回提示されるかどうかは分かりませんが、永遠に空白にはできませんので、これからはもっと国民にわかるような提示や進め方をしていくことが重要なんだろうと思います。

この図面は、ＮＵＭＯさんが書かれた図面なので仕方がないんですけれども、全国的取り組みのところには常に国の姿勢として、国民への理解活動が欠かせないものがありますし、常に初心者に対する基本的な姿勢をきちんと表明していただき続けることが必要なのだと思います。

この図面にはまだ書かれていませんが、この前後左右のところに、全体像として国の方向性、未来を語る、そしてエネルギー政策の中で何を望むのか期待するのかということが書かれてあって、パーツとしてこの委員会の活動やＮＵＭＯさんの活動や、高レベル放射性廃棄物の図面のようなことが落とし込まれてご説明をいただくと、国民にとってはより理解されやすいですし、先を展望しやすいですし、課題が読みとりやすくなっていくのではないかと思うんですね。

深掘りをしていくと部分的なことがどんどん深くなってはいくのですが、常に情報を持たない方たちや新しく関わる方たちの関心や参画を意義づけなければならないので、そのためにはやはりいつも全体像の中の位置づけを提示することも重要かと思いますので、こういう図面を起こすときにもう一つ工夫をしていただくとありがたいなと思っています。

以上です。

○髙橋委員長

どうもありがとうございました。

それでは寿楽委員、お願いいたします。

○寿楽委員

ありがとうございます。しばらく開かれていなくて、しかも前回休んでしまいましたので、ちょっとたくさんあってなるべく整理して申し上げたいと思います。

まず前回のご議論もあって、この有望地に関してかなり丁寧に見直しをするということになったということはとてもいいことだと私は基本的には思っております。ですけれども、そういういろんな議論があって、また社会からもフィードバックがあって、変えるというのは決して悪いことではなくてむしろいいことであると思うんですが、そうであれば、どう変わって、なぜ変わって、そしてどういういいところがあるのかということは最初にはっきり言っていただいたほうがよいと思います。きょう例えばこの資料１のタイトルが有望地に関するマップの提示に向けたとなっていますが、有望地に関するマップという表現自体、これまでとは修正いただいていると思うんですね。それが変わったこと、そして変わったその心はどうかというところを最初にはっきり言っていただくと、よりよいのではないかなと思います。

やっぱりこの有望地ということ、今まで２年間にわたって全国シンポジウムをされて、また並行してさまざまなより小規模なもの等も含めて、有望地が提示されるという前提で市民の皆さんにお話ししてきたわけです。もちろん、今回はさらに表現を適切なものにしようという意図からのものではあるのでしょうけれども、やや含意が少し変化する部分があるわけですので、そこはきちんとしないといけないんじゃないかなと思います。

例えば一般の方々からすると、有望地と言わなくなるということは、有望な場所の選定を目

指すことをやめちゃったのかと、安全上の最善を目指すというのはもう取り下げるようなことになってしまったのかとか、いろいろまたそのことについて皆さん思われるところがあると思うんです。

また、きょうの資料では、例えば４ページにあくまで一定の安全上の基準がクリアされた地点を探す努力と書いてあります。これは工学的にそういう考え方でこの施設を考えるというのは全くそのとおりなんだろうと、私もある程度勉強した人間としては思いますが、しかし同時に一般の皆さんの願いというのは、少しでも安全な場所に少しでも安全な施設をつくり、少しでも安全に事業していただいて、結局リスクは一番抑え込まれるのが一番であると皆さん素朴に願っておられるのであって、その間をどういうふうに制度や技術や実際の運用で実現していくかというところがポイントなわけだと思うんですね。

ですので、その意味でマップのこの言葉遣いが変わって、マップというふうに略称しちゃうと、何のマップかもそれだけではおよそわからないのであって、そこのところをどうするのかなと思います。

ちなみにそれに関して付け加えて言いますと、これまでは有望地というのはいかなるものかということで、大変熱心にそういう説明をするような、理解活動と皆さん呼ばれるものをされてきたわけですが、今回もこのマップ提示の前後で同じようなことをされるような予定があるのかどうかということについても、ご計画の範囲で教えていただければと思います。

それからその後なんですけれども、今後のことについて語るときには、今、新野委員からもありましたように、この対話のプロセスを説明するだけではなくて、より全体としてこの施設をつくって処分していくということ、全体について政府やNUMOにおいてどういう見通しを持って、どのぐらいの時間フレームで、どういう段階を踏みやっていくのかということをやはりある程度お示しいただく必要があり、またそういうことが一目瞭然となるような絵のようなものがあるのが一番よいのではないかなと思います。

当然、そうすると、これまでたくさん議論してきたことですが、いわゆる撤退権と呼ばれるようなものはどのように整理されて制度化されるのかということでありますとか、可逆性、回収可能性、これは基本方針の改定のときも入っているわけですけれども、実際にどういうふうに具現化されるのかとか、代替技術開発というのも入りましたけれども、それもこの絵の中にどういうふうに表現されるような形で進むのかとか、そういうことも議論して詰めていく必要があるはずです。

それから使用済み燃料の管理というのも一緒にちゃんとやっていくんだということも以前にすでに政策に入りましたが、今般「もんじゅ」の廃炉等もあって、サイクル政策にどういう見直

しがあって、そのことは使用済み燃料の管理にどういうふうに関係してくるのかとか、そういうことも全て整理して、こういうつもりでやっていくんですということを広く市民、関係者にお示しするべき段階に来ていて、それなしで対話を進めますということでは適切さを欠きます。対話は手段なのであって、皆さんが進めていく上では、対話そのものが目的ではないはずなので、対話することはもちろん大変それ自体意義深いことでありますけど、一般論としては、でもこれはこのことをまさに皆さんの言い方だと問題解決をしていくためにやるということなんでしょうから、ではどのような解決を考えているのかということを考え、示していただきたい。

それからその場合には、必要性と安全性を語るだけでは不十分だと思います。それだけではなく、なるほど高レベル放射性廃棄物の処分をそういうやり方でやるのはもっともなことで、それだったら納得できると思ってもらえるような一定の道理性みたいなものを備えることが必要です。今後、理解活動で広報されるときにはそういう部分も、つまり、必要だということを言うのと、安全だということを言うだけではなくて、そうすることがなぜ本当によいことなのかというようなあたりを丁寧に考えていただく必要があります。それから政府やNUMOにとってうまくいくのがいいということと、世の中全体にとってどうするのがいいのかということは重なり合いつつも、時には食い違う、だから修正しないといけないとか、そのために対話しているわけですから、そのあたりは気をつけていただきたいと思います。

それからこの社会科学の研究について、私も社会科学の研究者ですので、ちょっと利益相反みたいなところがあってお話しにくい面もあるのですが、ごくごく一般論として申し上げますと、この研究の自立性の確保のために、独立した委員会でテーマの採択であるとか、資金の分配みたいなことをお考えになっているというのは大変すばらしいことだと感じますが、同時にこのテーマの例のところで挙げられているようなものは、やや具体的で、短期的にNUMOや国にとっての課題解決というふうにそれこそなっていて、そういうことを考えることはいいことですけれども、私の感覚ではこうしたことは本来それら機関の中において政策や事業を考える上で検討され、答えが出されるべきものであったり、あるいは通常の委託研究のような形で非常に時間を区切って目的をはっきりさせて調べてもらうということにつながるものが多いのかなと思います。

社会科学研究ということでやる、学術的にやるのであれば、むしろ社会科学の研究者から見て、この問題に関してどういう論点が重要で、何について研究すべきかということはもっと広く考えていいはずですし、増田委員が出された「地方消滅」というご本がありますけれども、ああいったように今後、社会の大きな変化も想定されているところでありまして、事業期間が長い事業がそういう中でどう位置づけられていくのかとかという、そういう次元での研究というのもあってよいのではないかなと感じます。

以上、これは政府の資料についてでして、このＮＵＭＯのものにつきましては、先ほど来皆さんいろいろな言い方で指摘されているところでもありますけれども、また先ほど申し上げたこととも重なりますが、対話の改善のために対話から得たものを反映するだけではなくて、事業ですとか、ＮＵＭＯの運営ですとか、そういうことにこの対話で得たものをどう反映されているのかというところもあわせて聞きたいなというふうに思います。それが対話のアドバンテージなのであって、対話そのものをインプルーブすることはいいことでありますが、これもまたそれが最終目標ではないと思います。

それから朽山先生の資料につきましては、地震、津波等のことが挙げられておりまして、確かにこれは今後マップ提示になりましたら皆さんからお問い合わせやご質問、ご疑問があろうかと思う、私もそのように思いますけれども、そのときにやっぱり工学的に対処できるというような言い方は、それはもちろん根拠があっておっしゃっていることだというのはご専門の立場としては理解しますが、一方でやっぱり原子力の安全については、本当に大丈夫なのかという心配というのが世の中にたくさんあるところなのでもあって、大丈夫ですという言い方をなさるのは気をつけられたほうがよいのではないかなと思います。

例えばこの坑道の入り口を高いところに設置すれば、処分場の中に水が入ってくるのは防げるというのはそのとおりだとは思いますけれども、しかし同時に、じゃあ、港から陸揚げして輸送している最中にそういう事象が発生したときにはどうなのかというのは、当然別な検討になることなんであって、余り不用意に単純化して、こういうふうにやれるから大丈夫というふうに言うことはかえってどうかなと思います。

それから最後のページの補足というところは、優れて社会科学的という以上に価値にかかわる問題を論じておられて、こういう意見は私は非常に尊重したいと思いますが、これが技術ワーキングの検討状況とか、検討の結果なのかどうかということについては、ちょっとどうなのかなと思いますので、ちょっと補足してご説明いただければというふうに思います。

それからマップを提示しますと、当然社会の中でいろいろな議論が起こってくることにはなろうかと思いますけれども、それはあたかもボールは社会の側のほうに投げられたので、あとはそちらの問題ですというふうになってしまってはちょっとぐあいが悪いのであって、引き続きこの問題について責任を持って対処していくのは、ＮＵＭＯであったり政府であったり、あるいは電力事業者の皆さんも協力されるのかもしれませんが、そのことには何ら変わりはないということは確認していただいたほうがよいのではないかなと思います。

すみません、長くなりました。以上です。

○髙橋委員長

ほぼ全員手が挙がりまして、いろいろお出しいただきました。ここで、少しまとめたいと思いますので、増田委員までご発言いただいた後にちょっとまとめを。あとお三方はまたその後ということでお願いいたしたいと思います。

増田委員、よろしくお願いします。

○増田委員

ありがとうございます。まず、事務局、ＮＵＭＯのほうのご説明あるいは資料を拝見しまして、おおむねこういうことかなというふうに思っております。その上で、今、寿楽委員が最後にお話になったこととも関連しますが、特にマップを提示いたしますと、住民の皆さん方やその他の方から、自治体の首長さんや議会のほうにいろいろ、あれはどういうことなのかということの多分問い合わせも行くと思いますし、いろいろな人が行かれるということが考えられますが、自治体に何らかの新たな判断をお願いするようなものではないといったような、あるいは言葉を換えると自治体に対して能動的なものを求めていることではないという、そういうメッセージをきちんと伝えておくことが必要ではないか。

有体に言うと、ＮＵＭＯや国が各地域でその後、説明会を開催することを静かに見守っておいてほしいというようなことではないかと思いますので、そのことをマップの提示の前にきちんと自治体に伝えておく必要があるんではないかということが１点目です。

それからマップを提示してから文献調査までたどり着くというその間、大分長い時間がかかると思いますし、さまざまなことが予想されますので、これはこれまでもいろいろ議論ありましたが、地域の状況や反応を見ながら、その都度地域の皆さん方と一緒にＮＵＭＯなりが主体になって具体化をしていく話だと思います。そこはその都度考えるという姿勢でよろしいのではないかというふうに思います。

それから、杤山先生のほうでご説明がいろいろございました。地域や自治体の目線に立ってできるだけ丁寧に見ていこう、あるいはその後、丁寧に見てこられたというふうに私は理解をいたしました。

資料の４ページに書いてございますが、シンプルな言葉よりも、より丁寧に、そして科学的に言えること、言えないことを忠実に言葉としてワードとしても使っていこうと、こういうお考えのように私は理解をしまして、そのことに賛成であります。これまでの言い方である「適性が低い、適性がある、より適性が高い」ということを、例えばということでそこで例示をしていただいておりますけれども、できるだけ科学的に言えること、言えないことを忠実にということでお考えになった言葉かというふうに思います。

これで決まりということでは決してないと思いますが、より議論を深めていただいて、そし

て、より科学的に言えること言えないことを忠実に表現していこうというその姿勢でやっていくということが肝要だと思います。マップの提示からも、大変その後長い道のりが考えられますので、一番最初のところでボタンをかけ違わないという姿勢でいくべきであろうというふうに思います。

それからあと全体を通じてなんですが、要は適性があるということ、従来の表現ですと適性があるという表現になりますが、その範囲の中にも実は地層処分に適さない地点というのがあるわけですし、あるだろうと思います。これはもう本当に掘ってみないとわからないんですが、そういうことだと思いますし、適性が低いというところにも実は地層処分が可能なところも出てくると、こういうことだと思いますので、要は科学的に100％保証できるというものではなくて、あくまでも可能性の中で道を探っていく。

ただしその可能性の中で、できるだけ可能性の高い道を選ぶという観点から、いろいろ我々整理をしているわけですし、杤山先生のほうの技術ワーキングのほうでも、そういう形でこれまでも整理してこられたんだと理解しております。そういう整理を今後も維持していただいた上で、最後、繰り返しになりますが、丁寧さ、それから科学的に言えること言えないことを忠実にきちんと表現していこうというその姿勢に賛成でございますので、そういうことで取り組んでいただきたいと、このように思います。

○髙橋委員長

どうもありがとうございました。

かなりいろいろお出しいただきました。ご発言お三方残っておられますが、まずはここで少しまとめたいと思います。事務局からそれからＮＵＭＯから、今までのご指摘についてご回答等を頂戴したいと思います。

それではまず事務局からお願いします。

○小林放射性廃棄物等対策課長

たくさんのご意見ありがとうございました。非常にたくさんいただきましたので、特にご意見が重複したところを中心に考え方をお話しさせていただきます。もし漏れがありましたら、２ラウンド目の後に補足をしたいと思いますのでご指摘をください。

まず、今回の議論の経緯、そのことについての正確な理解ということでご指摘がありました。今回、マップというふうに、議論上便宜的に簡略化して申し上げたことにご指摘をいただきました。そのことに関して２点ほど申し上げたいと思います。まず科学的有望地という表現そのものを見直したほうがいいのではないかというご指摘、これについては、このワーキンググループでも過去２年の議論の中でも複数回、頂戴をしてきたところでございます。これは皆様のご記憶に

明確にあられると思いますが、それに加えてそのことについて伴う一種の誤解について、さまざまな対話の中で解消していこうという努力をしてきたこともご理解いただいていると思います。

ただそれにしても、この２年の経過を経て、これは適切に見直したほうがいいだろうということで、前回のこのワーキンググループでは、皆様のご意見もあり、事務局からもそのような考えを示させていただいたということでございまして、これを見直すということ自身はこのワーキンググループで確認をされたこと、つまり同じことをやっていくんだけれども、積極的にそのフレーズを使っていくことはないだろうという意味においてのコンセンサスはとれていたというふうに認識をしています。これが１点でございます。

それから、どうして略称にマップという言葉を今現在使っているかということでございますが、これは、杤山委員が委員長を務められている技術ワーキンググループのほうで、今回お示ししたいのは、どこがある種世の中でいうところの「適地」かということを示したいということよりは、日本の全国の、ここで言っているところの科学的な特性をしっかりと理解してほしいのだと、地層処分というのはどういうもので、どういうことがそれに関係してきて、科学的には日本全体を俯瞰したときにどういうことが言えるのかということをしっかりと伝えたいのだと、そういう意味で地図全体に目が行くようにしてほしいということが前々回、前回とご報告があったと承知をしております。

そうしたことも踏まえて、そのこと自身を受けて、このワーキンググループでも適切な表現の見直しをし、地図全体、マップ全体に目が行くようにしていくことが大事だというような確認は、10月の時点でしたわけでございます。これがご紹介したい２点目でございますが、そうした経緯を踏まえて、現時点では議論上の便宜としてはマップという言い方をさせていただいているということ、これはまず申し上げたいということでございます。

それから２点目、エネルギー政策全体の中でこの問題を語っていくことの重要性ということを複数の方からご指摘をいただきました。それはそのとおりだと認識をしております。これは全体があって各論があってということで、全体論だけを議論しても各論が進まないということではありますので、常に行きつ戻りつだということでございますし、そのようにご指摘もいただいてきましたけれども、引き続き心にとめてやっていきたいと思います。

それから３点目、これは時間軸、それからスタートだというようなご指摘に関することについて一言だけ。まずこれはあくまでも通過点であって、むしろこれによって国民議論のスタートを切りたいんだというようなことだと理解をしていると。それから提示をチャンス、そうした意味での高まり、議論の高まりのチャンスにすべきだというようなご指摘をいただきました。そのとおりだと思っています。

したがいまして、そういう長い道のりの中の最初の一歩だという言い方もしてきていますが、そのことについてきちんとしたコミュニケーションをあらかじめしていきたいというふうに思います。それは自治体との関係でも大事なことだというご指摘もいただきました。そのとおりだと思っております。

そうした中で、検討状況を逐次ご紹介しながら、行きつ戻りつ進んでいくことが大事だという話がありまして、そのことにも関係しますが、時間軸をあらかじめ区切って示していくことの難しさというものが、この問題にはどうしてもあるなというふうに思います。

振り返りますとこの２年でも、当初こちらで議論したことを世の中に話していけば、想定したことも想定しなかったことも反応としてはあるわけでございまして、それを踏まえて新しい取り組みに活かしていくということをさせていただいてきました。この後、このマップをつくる段になっても、それから提示していく段になっても、同じようなことがあろうかと思いますので、そうしたことで、もちろんイニシアチブをとってやっていくということは大事なことでありますけれども、常に国民の皆さん、地域の方々の反応を見ながら進んでいきたいというふうに考えております。

以上、大きなところで３点申し上げました。まだ細かなところあったかもしれませんけれども、取りこぼしがあればご指摘をいただければと思います。

ありがとうございます。

○髙橋委員長

それでは若干ＮＵＭＯにもご質問ございましたので、それについて簡単にご説明を頂戴したいと思います。

○宮澤理事

それでは幾つかございましたが、特に今の対話活動計画をどういうふうに考えていくんだ、あるいは具体的なものは今示されるのかというご発言がございました。それにつきましては今まさに策定中でございまして、今、各委員からご指摘を頂戴しましたようなことをしっかり心にとどめて、対話活動計画に反映していくということでさせていただきたいと存じます。

それともう１点、特に寿楽委員からございましたいわゆる対話の中で得たことをどのように組織運営、あるいは組織の中で反映していくんだというご指摘がございました。これにつきましても、私ども全国各地でまさにこの対話をしておりますと、私どもが気づかなかったこと、あるいは私どもが教えられることが多々ございまして、それに対しまして職員の、そもそもＮＵＭＯの職員が大半はスペシャリストでもございませんし、あるいはこの問題のスペシャリストでもありません、そういった中でそういった貴重なご意見を頂戴しまして、基本的なリテラシーの向上、

あるいは対話をつくっていく力というところも研修に反映したり、あるいはそれをもってまた新たな対話活動に出ていくということも、当然ＰＤＣＡを繰り返しながらやっておるということは注意して、組織のほうにも反映していくということにしております。

以上２点ほど。

○髙橋委員長

杤山委員は最後に全体のご発言をいただくことにします。残っていらっしゃいます伊藤委員、山崎委員、吉田委員の順番でご発言を頂戴して、その上で何かさらにどうしてもということであれば、時間がまいっておりますので、本当にお一方、お二方という形でお願いしたいと思います。

それでは伊藤委員から。

○伊藤委員

ありがとうございました。全体としてこのマップの提示がどういう意味を持つのか、またその前後での対話の重要性を改めて確認するというようなことであったと思います。

まず、杤山先生の技術ワーキングに関するご報告で、資料３の４ページのところですけれども、特に上から３つ目の黒丸のところで、適性が低い、あるというのはいろいろまた表現ぶりは検討するということなんですけれども、適性が低いと整理した範囲でも地層処分に適した地点を確保できる可能性がある。逆に適性があるというところでも適さないところが出てくる可能性はあるということが示されておりまして、このご指摘は非常に大きな意味を持っていると個人的には考えております。

特にマップ自体が、もちろん一定の絞り込みではありますし、情報の集約という点では大きな意味を持つわけですけれども、それがどういう位置づけになっているのかということを一般の方にもご理解をいただくという面でも非常に重要なご指摘でありまして、その後、当ワーキングでもご確認いただきたいというご趣旨のことが書かれております。この辺は非常に重要な点で、今後議論をしていく必要があるんだろうと思っています。

それを踏まえますと、ＮＵＭＯのご報告に関してですけれども、ＮＵＭＯの資料のスライドの３ページのところに、上の地域ごとのきめ細やかな対話活動の展開というところの３つ目のところで、マップ上のより適性が高い地域で重点的な対話活動を展開してまいりますという表現がございます。これ自体はもちろん理解できるところなんですけれども、ただ、今後マップが提示された上で、適性が低い、あるいはあるというような形で出たところと、実際に対話活動を展開していく上では、より適性が高い地域だけで議論が完結するというわけでは当然ないということだと思います。表現ぶりはまた別として、仮に適性が低いとされた地域でも、全体の国民の理解を得るための対話活動というものの意義はもちろんあると思いますので、その点についてもぜひ

ご配慮をいただきたいというのが一つです。

それから同時にＮＵＭＯのこの資料に関してですけれども、同じ３ページ目のところで一番最後の矢印のところ、できれば複数の自治体で同時期に文献調査を行っていくという表現がございます。このこと自体を私は別に否定するわけではないんですけれども、ここで自治体という言葉が出てまいりまして、これは先ほどの増田委員のご指摘とも関係するわけですけれども、恐らく自治体の当事者としては、ちょっとぎょっとするといいますか、少し驚きをもって受けとめられる可能性があるかもしれません。このマップの提示自体が自治体の関係者の方にどういう意味があるのかということを丁寧にご説明して、ご理解いただくということも踏まえますと、表現ぶりに関してもう少しご配慮いただければというふうに考えております。

以上です。

○髙橋委員長

それでは山崎委員、お願いします。

○山崎委員

ありがとうございます。山崎です。私の意見は、朽山先生がきょう資料を出されまして、特に一番最後の５番目、これはワーキンググループで出たわけではなくて、朽山先生が今回出されたんだろうと思いますけれども、イメージよくまとめておられて、私、非常にこの文章に感動しました。

要するに今回のマップというのは、前から申し上げていますけれども、決して絞り込むものではないんですね。日本全体の中での適性な地域があるんだということを示すことが目的なんですね。その後で実際に対話活動等を広げようということなんですけれども、この対話活動、一体何をするかということは、もちろんマップに示したことが、これは技術ワーキングで地球科学的な情報をもとにつくったものですけれども、先ほどリスクの議論もちょっとありましたが、リスクというのはいろんなリスクがあります。それはもちろん社会的なリスクとか、エネルギー問題のリスクとか、いろんなリスクがあって、もちろん地球科学的な情報で都合のいいところ悪いところってあるわけですけれども、そういうものをあわせた上で、各国民が自分のいろんなリスクをもとに本当に廃棄物の問題というのを検討していただいて、それで理解していただくということが一番私は重要で、それが目的ではないかなと。

そういうことを踏まえた上で、それぞれの地域、全国的なそういう地域で議論が展開されれば、この廃棄物処分の理解というのはすごく進むわけで、もちろん先ほどおっしゃったようにその中で相対的ないろんなリスクの低いところ、高いところが出てくると思うので、そういうことが一番このマップとして必要なこと、意義ではないかなと思っております。これが今回、朽山先

生のご意見をサポートするということです。

以上です。

○髙橋委員長

それでは吉田委員、お願いします。

○吉田委員

ありがとうございます。私も技術ワーキンググループの１メンバーとしまして、この科学的有望地ってこれまで言われているものに関しての技術ワーキンググループでの検討部分から、お話ししたいと思いますけど、まずこの科学的有望地という言葉で、これまでいろんなところで地域対話とかコミュニケーションをさせていただいたときに、皆さんが思われているイメージというのは最適地を提示するかのような、そういう部分がどうしてもあったかというふうに思っています。

それについては、技術的な検討を行ってきたある種の反省も踏まえてということなんですが、これがまずはスタートなんですよという話をしても、最後に、何か質問がありませんかという話になると、それで有望地はどこなんですかという言葉になってしまうというコミュニケーションの難しさというものを考えつつ、コミュニケーションが大事なんだなと思った次第です。

そう思いつつ、この技術ワーキンググループで何を検討してきたのか、追加で検討してきたのかということも踏まえて思いますに、要は、技術ワーキンググループというのは地層処分における地質科学的な観点からの要件の抽出と、その要件の技術的な妥当性を確認してきたというのが趣旨であって、判断をしたわけではないということです。

判断というのは何かというと、さもこの地域は地層処分にも㊟ですよというような判断をしたわけではない。もちろん技術ワーキンググループの中ではそれまでの議論においては、そういうことが本当に地質科学的な条件だけで、要件を抽出するときに判断できるのかどうかという議論もあったというふうには認識しています。

ですが、それはやっぱり安全評価だとかいろいろな観点も加味した上での判断であるべきであって、判断はできないものの抽出はできるという、そこの部分が科学的有望地の言葉との乖離といいますか、わかりにくい部分となってしまったのかなというのは、反省しないといけないと思っています。

それを技術ワーキンググループの各メンバーの共有として、今回の杤山委員の前半の部分という形でメモとしてなっているという認識を私もしていますし、これについてはそういう状況ですということを皆さんに私も補足としてお伝えしたいというふうに思っています。

そういう意味で、杤山先生の４ページのところにありますが、技術ワーキンググループでは

科学的有望地の提示ではなく、地域の科学的な特性の提示という表現になっていますが、あえてこれももうちょっと正確を期して言うのであれば、「地層処分における地域の地質科学的な特性の提示」であって、それ以上でもないしそれ以下でもないという、それを皆さんに理解していただいた上で議論のスタートにしたいという認識にあるということです。

もちろんこのワーキンググループでの議論、いただいたコメントを私なりに理解して、また技術ワーキンググループもありますので、そこでは議論に活用させていただきたいと思っています。以上です。

○髙橋委員長

それでは幾つか、コメントございましたので、杤山委員、それも含めて。

○杤山委員

はい、幾つかいただきました。全体としては、寿楽委員から津波のところの書き方についてご指摘あったんですけれども、これも実は今回のワーディングの問題で、いろいろありまして、最後はいろいろな形で判断という形になるんですけれども、実際に科学でできることは判断ではなくて、それまでの程度を、ある程度このぐらいですよということを示すことまではできても判断はできない。しかし最後に示さなきゃいけないような判断になってしまっているわけですね。そこのところで言葉のいろんな意味の誤解が生じてしまうということが特にございます。

ここにも非常に簡単に書いてございまして、十分に可能であるという言葉は、実際の中身はもう少しあるんですけれども、こういうふうに書いてしまうとやはり寿楽委員がおっしゃったような誤解につながると。それから適地の話もそうですし、科学的有望地という話もそうです。

我々、地層処分技術ワーキングでやったことの内容というのは、先ほど技術ワーキングの委員の先生方からご指摘いただいたように、あくまでもこういう場所ならできますというような場所の日本の地質環境を示しただけの話であって、地域をあるランクづけしようとしたものではないんですね。ところが、どうしても受け取る側は、地域をランクづけしてこれからやっていこうとしているんでしょうというふうに受け取られると。それは違いますよと、我々はこういう場所ならできるんですよと言って、十分に安全にできると。

先ほどの私のマップの提示の意義のところで少し申し上げましたけれども、実際には十分に安全な仕事です、これがうまくいけば、今いろんなところの環境で生活をされている人々、現在、将来の人々、全部安全になりますよということに、そういう公共事業として廃棄物の問題を解決しようとしているんですという形でやろうとしていることを示そうとしているわけです。

ところが、皆さんは、どうしても自分のそばから遠くへ行けばいいんだということで、どこかに持っていこうとしているんだという格好で物事を解決しようとしていると。それが廃棄物の

押しつけ合いのような格好になって、ものを解決しようとしているんでしょうという受け取り方をされるわけですね。

これは廃棄物をどこかに持っていくという話と、それから廃棄物の問題をちゃんと解決して、今の生活環境から隠して閉じ込めておくということと全く違うことなんですが、それが誤解されてしまっているということですので、その地層処分の考え方そのものを理解していただいて、協力していただきたいと。どこかに協力していただきたいんだというそれを理解してもらうためのマップの提示ということですので、それをきちんと説明しながらやらないと、なかなかこういう誤解というのはどうしても超えられない部分ができてしまうというのではないかと思います。幾つかご指摘いただきましたが、内容的にはそこのところで我々いろいろ苦しんでいるんだということがございますので。

それから伴委員から、少し見直した結果わかりにくくなっているということがございました。これはどうしても、先ほども言ったように非常に簡単な言葉で言ってしまうことによって、逆に誤解が生じてしまうと。非常に簡単な言葉で言っていたときは、わかったと思ってしまうということがございます。わかったというのは、実は内容じゃなくて、誤解したままわかったと思ってしまうことがたくさんあるということなんですね。それが非常にいろんなところで問題を引き起こすということがございます。

特に我々技術ワーキングで検討したのはそこでございまして、できるだけ科学でわかっていることをその範囲で伝えたいという中で、少し言葉としてわかりにくくなったかもしれないですけど、わかりにくくなった分は、わかりにくいじゃないかと思って、その内容をきちんと考えていただくということにつながるんじゃないかなと思ってこういうふうにしたという次第でございます。

以上です。

○髙橋委員長

どうもありがとうございます。

ちょっと時間がありますし、事務局の説明も少しはしょったところがございます。どうしても何か追加でというのがあれば一言だけ、ほかいらっしゃいませんか。

じゃ、寿楽委員だけ一言。

○寿楽委員

すみません、一言だけ。ご回答は次回の場で構いませんけれども。きょう伺っていますと、今般のこのマップはとにかく絞り込むものではないのだと、広く考えていただくことに主眼があるのだということを強調されるご説明があって、それはそれで筋は通っているとは思いますが、

そもそもの議論は、なぜここかというご質問に答えられないので、科学的に適したところを示してほしいということだったと理解しています。

中間取りまとめを見ましても、地層が安定しており処分に最適であることを理由にすべきで、地元の関心を理由にしないでほしいとかいうご意見があったので、有望地みたいなことを考えるというところから議論がスタートし、そしてこの基本方針の中にも科学的により適性が高いと考えられる地域という表現になっているはずです。直すこと自体には別に私は全く反対しないのですけれども、そういう従来積み上げてきたものがどのレベルで変わるのか、変わらないのか。例えば基本方針、次回のときに反映する前提でもうこれ進んでいくとか、そういうことなのかとか、去年受けたＮＥＡのレビューはもう一回やるのかとか、そういうことも含めて考えていただきたいと思います。

それから複数地域とか複数自治体というのはさっき伊藤先生からもありましたけれども、これもちょっと去年までの一般の方に対するご説明の中では必ずしもはっきり資料等にはなかったことをさっきちょっと確認しましたので、今回出たことについて、これも別にそういう考え方があっても全く構わないとは思いますが、どういう経緯で、ご存念で出てきたのかというのを次回よりはっきりご説明いただければと思います。

以上です。

○髙橋委員長

事務局まとめでありますか。じゃ、事務局にまとめていただいて。

○小林放射性廃棄物等対策課長

ありがとうございます。今の点、寿楽委員からの、また次回と思いますけれども、従来からこのワーキンググループで議論してきたことの方針なり考え方が変わったということではないと理解をしています。科学的に言えることは示していくということが、この話を前進させることになるんではないかという考え方で、相対的によりよいところがあればそれを示していこう、科学の考え方を示していこうということでございまして、今まで議論してきたこともまさにそのとおりだと思っています。

それをどのような言葉で伝えていくことがより忠実に伝わるのかということについては、これまでのまさに国民の方々とのコミュニケーションの実績を踏まえて適切に見直しをしているということであると理解しています。

科学によってのみでは場所が決まるものではないということは、この検討の前からある意味関係者の間では共有されていたことであり、それが改めて議論の結果、確認をされ、そのことを伝えていくことの重要性も再確認されたという理解をしております。この点、次回改めてと思い

ます。

複数のところということは、これは実は関係閣僚会議で複数地点にという話をしたことが既にございます。そのことをハイライトしてきたかどうかということについては、都度、都度の濃淡があったかと思いますけれども、初出でないということだけはこのタイミングで言及させていただきたいと思います。

ありがとうございます。

○髙橋委員長

どうもありがとうございました。

時間になりました。まずマップの提示の意味合いや提示後の進め方につきまして、基本的にはご了解いただいたと思います。ただ寿楽委員、ご指摘のように、これまでの経緯の説明の仕方であるとか、さまざまな細かな表現、いろいろとご提示いただきました。この辺は事務局やＮＵＭＯのほうで検討の上、うまく中身に取り入れていただきたいというふうに思っています。

また、地層処分ワーキンググループにおかれましては、本日出された意見も踏まえまして、さらに検討を続けていただきたいと思います。検討が進みましたら、また改めてご報告お願いしたいというふうに思います。よろしくお願いいたします。

それでは最後に次回のワーキングの日程につきまして、事務局のほうからご説明頂戴したいと思います。

○小林放射性廃棄物等対策課長

ありがとうございます。今、委員長からお話ありましたように、技術ワーキンググループのほうで議論が進展したところで改めてと思います。今日いただいたご意見も含めて議論ということだと思います。日程調整は、事務的にまたその進捗を見ながらやらせていただきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

○髙橋委員長

それでは、これをもちまして第30回の放射性廃棄物ワーキンググループを閉会したいと思います。本日はご多忙のところ長時間にわたりご熱心にご議論いただきありがとうございました。

どうもありがとうございます。

－了－